

## 小説の中の吸血鬼(2)

### (三) 『ドラキュラ』

吸血鬼を世に知らしめた『ドラキュラ』は、ジョナサン・ハーカールの日記から始まる。読者は、作品を読み始めると同時に、怪奇の世界の中に引きずり込まれていく。とりわけ、ジョナサンがドラキュラの正体とその世界を事細かに描いていく、この冒頭の部分は、『ドラキュラ』という作品が、紛れもなくゴシック小説の伝統を受け継いでいることを示している。ジョナサンはロンドンのパーフリートの土地を購入するドラキュラ伯爵と契約を済ませるべ

### 塩川 千尋

く、「森のかたの国」トランシルヴァニアのドラキュラ城に行く途中である。列車の停車時間の間にブダペストの町を歩きながら、彼は「西洋を離れ、東洋に入って行くような」<sup>(1)</sup>印象を受ける。事実、ジョナサンは西と東の接点を越えようとしており、合理的・科学的思考の世界から、迷信と伝説が支配する世界に足を踏み入れつつある。ドラキュラ城は「世界中の迷信が結集されている」<sup>(2)</sup>「馬蹄形のカルパチア山脈の真った中にあり、ヨーロッパの中で最も文明から離れ、知られていない」<sup>(3)</sup>ところにある。このことが彼の潜在意識を刺激したかのように、彼は「ありとあらゆる奇妙な夢」を見る。彼が宿でドラキュラ伯爵

の名を口にする、まわりの人は彼には不可解な恐怖の表情を見せる。

ジョナサンが目的地に近づくにつれ、ゴシック的な雰囲気は強まっていく。彼の乗った馬車がボルゴ峠に入る時はすでに日は落ち、辺りは闇に包まれている。そしてその夜は「十二時の鐘の音と共にあらゆる悪霊が世界を支配するようになる」(四)聖ジョージの祝日の前夜である。天候が場面と一致するゴシック小説らしく、彼の頭上では低い雲が流れ、「雷が来そうな重苦しさ」(九)が空気中を漂う。

ドラキュラ城からやって来た迎えの馬車を駆る御者は不気味さを強める。ぎらぎらしたその目は「ランプの光を受けて赤く」(二〇)見え、歯は尖っている。彼が馬車に乗る時に腕を掴んだ御者の手は、「万力」(一四)を思わせるほど強い。一人、迎えの馬車に乗ると、ジョナサンは「奇妙な寒気と孤独感」(二二)を覚える。

文明の地からやって来たジョナサンは、その土地の雰囲気と一連の出来事のために現実感を失っていく。このことは、彼が何度か「私は眠っていたに違いない」「私は夢を見ているに違いない」という表現を使っていることに現れる。ジョナサンは自分が目覚めているのか、眠っているのか

かもはっきりしない状態にある。彼の理性は麻痺状態に陥り、夜の十二時が近づいていることに気づくと、ビストリツアの宿で聞いた迷信を思い出し、「気分が悪くなるような不安」を覚えてしまう。彼の不安はさらに強まっていく。「恐怖にかられたかのような、長い、苦しそうな」犬の遠吠えに続き、狼の遠吠えが聞こえてくると、彼は馬車から飛び下りたくなるほどの恐怖におそわれる。

作者ブラム・ストーカーは、多くのゴシック小説の作家にならい、巧みに月を見え隠れさせて視覚的效果を狙う。

ジョナサンは近づいてくる狼の吠え声に恐怖を覚えているが、いつの間にか、あたりは静まり返っている。しかし、黒い雲が切れ、突然、明るい月が現れると、彼は自分が不気味な沈黙を守る「生きた恐怖の輪」(二三)の中にいることを知る。狼の群れは、御者が腕をひと振りすると、輪を広げて彼らから遠のいていく。同時に月は再び雲に覆われ、辺りはまた闇に包まれる。

都合よく吹く「一陣の風」も、ゴシック小説の常套手段の一つである。ブラム・ストーカーは、追い詰められたジョナサンから逃げ道を塞ぐべく、この「一陣の風」を利用する。柩の中に横たわるドラキュラに一撃を加えたあと、

ジョナサンは「新たな入口」(五二)を見つけようと地下室へ急ぐが、「その瞬間、強い一陣の風が吹いたようであり、らせん階段に通じる戸は大きな音をたてて」閉まってしまふ。

ジョナサンを約二箇月にわたって閉じ込めるドラキュラ城は、『ユドルフォ城の神秘』(ミセス・アン・ラドクリフ作)の舞台となる城を思わせる。ジョナサンは城を窓から観察し、それが「恐ろしい崖の淵にたつ」ことを知り「窓から落とした石が、何ものにも触らずに千フィート落下する」(二六)であろうと思う。この孤立した城の中に彼がドラキュラ伯爵と二人きりになるといふ状況も、ユドルフォ城におけるエミリーとモントーニのそれと同じである。

さらに、ドラキュラがルーシーとミナというヒロインを襲い、それを善玉が助ける、あるいは助けようとするという状況も、ゴシック小説の伝統を受け継いでいる。ただ、この作品では、ドラキュラという悪玉があまりにも強大であるため、それに対抗するには五人の善玉を必要とする。ドラキュラがイギリス侵略という、大きな目的と、それを達成するだけの力を与えられているため、善玉には社会のエリート的人物が選ばれている。善玉の中心的存在である

ヴァン・ヘルシング教授は、科学者であると同時に吸血鬼伝説に詳しい、ヴァンパイア・キラーである。シードも科学を代表する人間である。弁護士ジョナサンは社会の法を代表し、貴族のゴダリング卿は富を、そして実的なアメリカ人クインシー・モリスは、富と行動力を象徴する。

このように、ブラム・ストーカーはゴシック小説の伝統を取り入れながら、それに吸血鬼伝説を織り混ぜて物語を展開させていく。ジョナサンの目を通して描かれるドラキュラの姿は、大体は吸血鬼伝説に基づいている。ジョナサンと同じテーブルについても、彼は決して食べ物を口にしない。彼の姿は鏡には映らないし、歯は「奇妙に鋭く」(二七)「耳は先端が尖って」(二八)いる。彼には悪臭が漂い、彼の手で触られるとジョナサンは「身震い」を抑えることができず「ひどい吐き気」を覚える。彼は狼やこウもりに変身できるし、霧やほりになることもできる。嵐をおこすことも可能である。同時にドラキュラにはいくつもの弱点もあるが、いずれも吸血鬼伝説の中で語り継がれてきたものである。吸血鬼を滅ぼす方法も同様である。

しかし、ドラキュラは伝説の中の吸血鬼そのままではな

く、特に強調されている部分や修正が加えられている部分も見られる。前者は、吸血鬼が伝染力をもつこと、つまり吸血鬼の犠牲者は、死後、吸血鬼になること、及び、吸血鬼が性的魅力を武器とすることの二点であり、いずれもこの作品を支える重要な特徴となっている。ドラキュラがイギリス侵略をもくろむのは、吸血鬼であることが伝染するからこそ可能なのだ。ルーシーが犠牲となり、ミナが危うくなるのもそのためである。伝説の中では、吸血鬼の性的魅力は特に目立つわけではないが、減多に同性を狙わず、多くは異性を襲うことから、吸血鬼が血を吸う行為に性的暗示を見出すことは容易である。『ドラキュラ』ではこの点が強く前面に押し出され、ジョナサンが血を吸われそうになる場面や、ミナがドラキュラに襲われる場面、そして吸血鬼になりかかったルーシーが、アーサーを誘惑する場面という物語の山場では、性的イメージが色濃く漂う。

ジョナサンは、指定された部屋以外のところで眠ってはならないというドラキュラの警告に反し、別の部屋でうとうとする——主人公が入ってはならない部屋に入り、そこで恐ろしい経験をするというのも、ゴシック小説の常套手段の一つである。目を覚ました彼の前には、「身なりと態度

から」(三七)淑女と思われる三人の若い女が立っている。ジョナサンには彼女たちの唇が「肉感的」に思え、「あの赤い唇でキスをしてくれないかという、ふしだらな、しかし燃えるような欲望」を覚える。同時に彼の心には強い恐怖も共存する。吸血鬼との遭遇は、欲望と嫌悪感を与えるという、アンビバレンスを持つ。

金髪の女がなまめかしく首を振ると、他の二人が彼女を促した。一人が言った。

「さあ、あなたが最初よ。私たちはあとでいい。

最初はあなたの権利よ」もう一人が言った。

「若くてたくましい男よ。私たちみんながキスしても大丈夫だわ」私は静かに横になったまま、喜びに満ちた激しい期待感を抱きながら、薄目で見ていた。金髪の女が近づいてきた。そして私の上に身をかがめた。彼女の息づかいが感じられた。それは甘い香りだった。蜜のように甘いその香りは、声と同じように、私の神経をむずがゆくさせた。しかし、その甘さには、血の臭いをかいだ時のような、吐き気を催させる生臭さがあった。

私は恐ろしくて目を開けられなかったが、薄目ですべてをよく見ていた。金髪の女は膝まずくと、私の上にかがんで嬉しそうに私をながめまわした。その様子には、何か意図的に自らの肉欲をかき立てているようなところがあり、私は興奮とおぞましさを同時に覚えた。そして首をそらすと、動物のように実際に舌で唇をなめた。真つ赤な唇と、白く尖った歯をなめる舌が唾液で濡れて、月の光の中で光っていた。彼女の頭がだんだん下にさがり、私の口と顎より低いところまでいった。そして喉に吸い付くかと思うと、動作をとめた。彼女が舌で歯と唇をピチャピチャなめる音が聞こえ、私の首に熱い息がかかった。それから、くすぐろうとしている手がだんだん近づいてくる時に感じる、あのむずがゆさを首の皮膚に感じた。私は過敏になった喉の皮膚に、柔らかな震える唇が触れ、二本の鋭い歯がそこに触れて止まるのを感じた。私はけだるい恍惚感の中で目を閉じ、心臓をドキドキさせながら待っていた。(三八)

この三人の女を滅ぼすべく、単身ドラキュラ城に乗り込む

ヴァン・ヘルシング教授ですら、「生き生きとした、肉感的な美しさをたたえて」(三六九) 柩の中に横たわる彼らの姿をみると、危うく思考力を失いかける。睡魔のようなその魅力は彼を麻痺させ、まどろみへと引きずり込む。母親の霊の聲がカーミラを死の淵から呼び戻したように、彼は突然聞こえてくるミナの「悲しみと憐憫に満ちた、長く低い叫び声」(三七〇)によって、「甘い魅惑」から救われる。

ブラム・ストーカーは、シェリダン・レ・ファニュがカーミラを描く時に「けだるい」「けだるさ」「倦怠」という語を多用したように、吸血女の誘惑を描く時には語彙不足を思わせるほど、同じ言葉を繰り返す。吸血鬼になりかかったルーシーは、死ぬ直前、「柔らかな、肉感的な声」(二六一)でアーサーにキスを求める。吸血鬼となった姿を見るシーワードは「(生前の)清潔さが肉感的でふしだらな様子に変わった」(二二一)と思う。ヴァン・ヘルシングとシーワード、アーサー、クインシーに追い詰められるとそれは「けだるそうな、肉感的な魅力を見せながら」アーサーに近づく。

一方、吸血鬼伝説に加えられた修正の最も顕著な点は、

ドラキュラに見られる。彼には血に飢えた吸血鬼というイメージはない。ドラキュラは決して手当たり次第に人間を襲い、血を吸うわけではない。彼にとって血を吸うことは目的ではなく、手段なのだ。勿論、彼は伝説の中の吸血鬼と同じように、自らの命と若さを保つために、人間の生き血を必要とする。ジョナサンは、ドラキュラ城の柩の中に「汚らしい蛭」(五一)のように横たわるドラキュラを発見した時、激しい恐怖を抱く。血を吸ってきたばかりのドラキュラが、若さを取り戻しつつあるのを知ったからだ。

「ドラキュラの」白髪と口髭は黒っぽい灰色に変わっており、頬は前よりふっくらとしていて、白い肌の下はルビーのように赤く見えた。口は前にも増して赤かった。唇に新鮮な血が付いていて、それが口元から顎と首に流れていたからだ。(五一)

これは紛れもなく、伝説の吸血鬼の姿ではある。しかし、長い年月、柩の中に横たわり、イギリス征服の計略を練ったドラキュラは、それを実行するためのエネルギーを必要としている。彼が血を吸うのは、大きな野心を実現するた

めのエネルギーを吸収するためであり、「キング・ヴァンパイア」(三七一)たるドラキュラが、三人の女の吸血鬼や「不死者」となったルーシーと異なる点である。さらに彼は誇り高い吸血鬼でもある。ジョナサン・ハーカーにトラシルヴァニアの歴史について質問されると、ドラキュラは得々と説明するが、その言葉はワラキアの君主としての誇りに満ちている。ブラム・ストーカーは、失われた栄光を取り戻そうとする、この野心と誇りに満ちたキング・ヴァンパイアのイメージを、歴史上の人物であるヴラド・ドラキュラに求めた。

ヴラド・ドラキュラは一五世紀ワラキアの君主であり、「当時のドイツ、ビザンツ、スラブ、トルコなどの記録や民間の恐怖物語では、しばしば、残忍な、あるいは狂気の統治者」<sup>(3)</sup>として登場する。ドラキュラは「ドラクール」(「悪魔、または龍」の息子)を意味する。ドラキュラ伯爵が、自らの偽名に「デ・ヴィール伯爵」(二七三)という名を選んだのも、そのためである。歴史上のドラキュラはおどろきの拷問方法ゆえに「串刺し公」の異名を取る。そして「ある一五世紀の記録」<sup>(4)</sup>に残されているように、吸血鬼と噂された。

このことは、ブラム・ストーカーが『ドラキュラ』の中で作り上げた吸血鬼像は、吸血鬼伝説と史実を混ぜ合わせたものであることを示している。しかし、彼は単に両者を足して二で割っただけではない。ストーカーの優れた点は、ヴラド・ドラキュラの性格的な弱点を利用し、それによって吸血鬼ドラキュラを滅ぼす最大の武器としていること、つまり、ドラキュラは自らの性格の中に、自滅を招く要因を持つという設定にしていることだ。そして、その弱点というのは、冷酷、残忍な君主らしい、徹底したエゴイズムである。

ドラキュラはエゴイズムという弱点ゆえに、人間に滅ぼされる——しかし、その前に、人間はその弱点を知らなくてはならない。さらにその前に、ドラキュラが吸血鬼であることを知り、この世に吸血鬼が存在することを認めなくてはならない。ストーカーは、読者の懷疑を予想しつつ、吸血鬼の存在に対する人間の懷疑を、ドラキュラの最大の武器としている。逆に言うと、このことは、吸血鬼の存在を信じ、吸血鬼に関する知識、情報を持つ人間がドラキュラの最大の敵であることを意味する。『ドラキュラ』においても、吸血鬼に関する知識、情報が重要な役割を果たし

ているわけである。次に、それが人間とドラキュラとの戦いにおいて、どのように機能しているか、そして、人間はどのようにしてドラキュラの弱点を探り、利用していくか——さらに、結末における矛盾の原因はなにか——という問題点を中心に、この作品を考察してみたい。

『ドラキュラ』においては、科学的知識は吸血鬼を滅ぼす上で何の役にも立たないばかりか、すべてを合理的に解決しようとする科学的態度は、人間の敗北につながる。ドラキュラが当時では最も文明の進んだイギリスを狙ったのは、まさしくそのことが理由である。科学的に説明のつかないことに對する不信こそ、ドラキュラの最大の力であるからだ。ヴァン・ヘルシングは、この点に言及して

「……賢明な人間の疑いこそ、奴（ドラキュラ）の最も大きな力となるだろう。それは奴の刀の鞘にも鎧にもなることだろうし、奴の敵、つまり、愛する人、人類、そして神の栄光のためには自らの魂をもすんで危険にさらそうとしている我々を滅ぼす武器となるだろう」（三二一）

と、吸血鬼の存在を疑うことの危険性を指摘する。住み慣れたトランシルヴァニアでは、吸血鬼伝説が深く浸透しており、人々にとって吸血鬼は架空の存在ではなく、現実の脅威である。どの家も「十字架やニンニク、野バラ、ナナカマド」(二八)によって守られており、つけない隙がない。しかし、文明の中心であるロンドンには吸血鬼の存在を信じておらず、したがって吸血鬼に対しては無防備だ。ドラキュラが自らの野心を満たす可能性をそこに見出して不思議ではない。

船乗り上がりのかたくなな老人スウェールズは、『みんな、なにもかも馬鹿なやつらがでつち上げた話で、他の何物でもねえ。呪いだの、ふわふわ空を飛ぶものなの、やれ幽霊だあ、化け物だのといったもんは、女子供をおっかながらせるだけのもんさ』(六四)と、あらゆる伝説を真向から否定する。彼はミナとルーシーに向かって、側にある墓石に刻まれた碑文がすべて「うそっぱち」(六五)であると言う。彼に言われてルーシーは『一八七三年七月二十九日、ケトルネスの岩場より転落し、栄えある復活を望みつつ死んだジョージ・キャノンの冥福を祈る。愛する息子の死を悼む母、これを建つ』(六七)という碑文を読む。

そこになら「おかしな」点を見出せないルーシーに、スウェールズはその碑文を捧げられた故人の生前に関する真相を、次のように暴露する。

「お前さんには、何もおかしなこととはおもえんだろ、あつ、は、は、だがこの、息子の死を悼むと書かれている母親は、息子がせむしだったもんで、えらく憎んでおつてな。息子には息子で、おふくろを憎むあまり、自分にかけた保険金が取れないようにと、自殺しちゃった。……栄えある復活を望みつつ、とあるがわしゃ当人が、俺は地獄に行きてえ、なにせ、おふくろはえらく信心深いから、きつと天国に行くだろう、俺はおふくろのいるところには行きたくねえ、と言うのをしよっちゅう聞かされていた。とにかく、うそのかたまりだあ、この墓石の文句は」(六七)

死者に鞭打つ言葉を平気で口にするスウェールズは、ホイットビーに上陸したばかりのドラキュラにあつさりと殺される。首を折られ、「見る者をぞっとさせる、恐怖の表情」(八七)を浮かべて死ぬスウェールズは、不信と軽蔑の眼差



しを向け続けてきた、理屈では説明のつかないものの犠牲となる。

この作品の中で吸血鬼の存在を信じることに最も大きな抵抗を示すのは、シーワード医師である。彼は『狂気』を専門とする精神科医であり、ドラキュラとの戦いにおいて重要な役割を課せられているが、同時に一九世紀末の読者の懷疑を代表する人物でもある。彼が吸血鬼の存在を確信するようにするためには、ルーシー・ウェステンラの犠牲が必要となる。シーワードはルーシーの衰弱の原因が「決して貧血ではない」(一一四)ことを確信できても、本当の原因をつかむことができず、オランダ人の恩師ヴァン・ヘルシング教授に助けを求める。ルーシーを診察したヘルシング教授は、直ちに彼女が吸血鬼に血を吸われていることを知るが、教授は彼女の周りの人間、とりわけ科学者たるシーワードに「吸血鬼」という言葉を口にすることに関しては極めて慎重である。

しかし、ヘルシング教授のこの慎重さは、ルーシーをドラキュラから守ることを不可能にしてしまう。彼はルーシーの衰弱の原因を理解し、足りなくなった血を補おうと、自分を含めて四人の男から彼女に輸血するが、本当の原因

を明かさないうために、ルーシーがドラキュラに血を吸われ続けるのを防ぐことができない。彼女に与えられた血は、結局、吸血鬼のエネルギーとなってしまふ。ヘルシングは彼女が吸血鬼になりかかっている兆候をいろいろと見せているにもかかわらず、事実を打ち明けようとしないうより、作者ブラム・ストーカーは、ヘルシング教授が簡単に事実を打ち明けられないような状況を作り上げ、ルーシーの犠牲が止むを得ない結果であることを読者に印象づける。彼女に血を与えた男は、いずれもルーシーと強い個人的な感情で結ばれている。アーサー・ホームウッド(ゴダルミング卿)は婚約者である。クインシー・モリスとシーワード医師は彼女に結婚を申込み、断られはしたものの、変わらない愛情を抱き続けている。そしてブラム・ストーカーはとりわけ、科学者であるシーワードを納得させることに時間をかける。

ヘルシングはルーシーの「病気」に効果があると称してニンニクの花の臭いを窓枠や戸のまわりに擦り込んだり、その花輪を彼女の首にかけてやる。側にいたシーワードは、『……ここに疑い深い人間がいなくて幸いです、もしいたら、あなたは悪霊を締め出すために、何かまじないごとを

していると言うでしょう』(一三二)と言うだけである。

この驚きと当惑は、ヘルシング教授が彼に真実を悟らせることに取り掛かるや、不信と疑惑に変わる。

当初、ヘルシング教授は、出来ることなら真実を自分一人の胸にしまっておこうとする。その結果、ルーシーを吸血鬼から守ろうとする彼の試みは、事実を知らされずにいた母親と、やはり事実を知らないために、ルーシーの死体の上に置かれた金の十字架を盗む貪欲な女中のために失敗に終わる。シーワードに対しても、彼はただ暗示に満ちた言葉を投げかけるだけである。ルーシーの死にある種の安堵を覚えながら、『やっと彼女は安らぎを得た。これで終わった』(一六二)と言うシーワードに、ヘルシングは理由を明かすことなく『そうじゃない! 悲しいことにそうじゃないんだ。これは始まりにすぎない!』と謎めいた言葉を口にする。ルーシーは死ぬ直前、異様な変貌を見せ、死後、その死体は時が経つにつれて美しさを増していく。科学者であるシーワードの疑問は、この不思議な現象にはなく、もっぱらヘルシング教授が理由を明かすことなく実行しようとしていることに向けられる。教授は彼に、ルーシーの死体の首を切り落とし、心臓を取り出す手伝いを頼む

が、ただ『私がやろうとしていることには、十分な理由があるんだ。……私を信じてくれないか』(一六五)と言うだけである。

ヘルシングは女中が金の十字架を盗んだことを知ると、ルーシーの死体が吸血鬼に変わるのを防げなかったことを悟るが、それは同時に、吸血鬼に関する知識を独り占めにすることは、吸血鬼に敗北することを意味する、と悟る時でもある。彼はシーワードとアーサー、クインシーに事実を告げる決意をするが、しかし、その時が来ても、彼は極めて慎重である。彼はシーワードが、様々な出来事や彼の言葉が暗示しているルーシーの死因にまだ気付いていないことに多少の苛立ちを見せながら、次のように言う。

「君は頭のいい人間だ、ジョン……しかし、あまりにも偏見に満ちている。君は自分の目と耳をちゃんと使っていない。君にとっては、日常生活の外にあるものは、重要性がないんだ。自分に理解できないことがあるとか、自分には見えないものを見る人がいると思ううことはないのかい。人から聞いて自分で分かったつもりになってしまったために、自分の目でじっくり見な

いものが、今も昔もたくさんあるのさ。何もかも説明したがるのが科学の欠点だ。説明できないことがあると、説明することは何もないと言うんだ。……」

(一九一)

このまわりくどい前置きに続き、ヘルシングは「自然界の不思議」と「可能なる不可能」(一九三)の具体例を挙げる。そしてシーワードに『信じられないことを信じてもらいたい』と、本題に入るために慎重に歩を進める。

それでもシーワードは、死んだはずのルーシーが生き返って子供の血を吸っていると聞かされると、「まるで彼〔ヘルシング〕が生前のルーシーに平手打ちを食らわせたかのような激しい怒り」(一九四)におそわれる。アーサーとクインシーも、彼とまったく同じ反応をみせる。彼らが事実を悟るためには、自分の目で、死後、吸血鬼となったルーシーの姿を見ることが必要となる。ヘンシングは三人を連れてキングステッドの墓地を訪れる。三人が納得したところで、ヴァンパイア・キラの役割を課せられたヘルシングは、吸血鬼伝説に従って、吸血鬼となったルーシーを滅ぼし、彼女の魂を「不滅という呪い」(二二四)から解放す

る。三人に吸血鬼の存在を納得させたヘンシングは『我々のこの悲しみの元凶を見つけだし、それを滅すという、もっと大きな仕事』(二二七)があることを告げて、彼らに協力を求める。

作品には「吸血鬼」ルーシーに関するプロットと平行して、ジョナサン・ハーカーが、妻となったミナと共に再登場し、「この悲しみの元凶」がドラキュラであることが確認される。この時点で二つのプロットは結びつき、六人が結束してドラキュラに戦いを挑むことになる。しかし、イギリスが危機に瀕するという、重大な局面を迎えながら、その元凶と戦うのは、吸血鬼の存在を信じる五人の男と一人の女だけなのだ。つまり、ヘルシングが言うように、「自分の目で見えるものすら信じない、この開化された時代」(三二二)においては、彼らは沈黙と秘密の中で行動しなくてはならない。したがって『ドラキュラ』という作品は、吸血鬼ドラキュラと、それを滅ぼさなくてはならない個人的な動機をもつ六人の人間という、小さな世界の中で展開される物語にならざるを得ない。

前述の通り、強大な力を持つドラキュラに対抗するこの六人の武器は、吸血鬼に関する知識、情報であるが、これ



か、正気だったのか狂っていたのかも分からない、あの忌まわしい時のことを思い出すことがどうしても必要になったら、話は別だが」(二〇四)

「なにか重大な義務」が生じ、彼に日記の封印を解くことを必要とするのは、それからすぐあとである。彼は、若返ったドラキュラの姿をロンドンで見かけ、ショック状態に陥るが、そのあと、公園のベンチで眠ってしまう。目を覚ましたジョナサンが「陰険な見知らぬ男」(二七三)のことをすっかり忘れた様子であることに不安を覚えるミナは夫から預かった日記を読む決意をする。

『ドラキュラ』は、日記や手紙、新聞の記事、航海日誌などによって構成されているが、この時点で、読者にはブラム・ストーカーがこの作品を書簡体になっている理由がはっきり分かってくる——登場人物の間における情報交換を容易にすることである。ストーカーは書簡体を用い、各登場人物に作品を語り継がせていくが、このことはたびたび視点が移動することを意味する。ウィルキー・コリンズは「視点の移動」が持つ可能性を利用することによって、作品を大いに面白くさせているが、ストーカーの意図は、そ

れと同じ面白さを作品に与えることではない。『ドラキュラ』の登場人物は、主に日記によって、話を交互に語り継いでいくだけであり、語り手が変わると、同じことに関する話がまったく異なるといふ現象は見られない。ミナがタイプで打ち直したジョナサン・ハーカーの日記が果たす役割は、あくまでもヘルシング教授とシーワード、アーサー、クインシーに情報を与えることなのである。

ストーカーは、作品の中で情報の重要性を何度も強調する。ドラキュラ城で日記をつけるジョナサンは、「『ドラキュラに関する』知識が、いづれ、何らかの形で役に立つかもしれない」(三十)ことを予感する。ジョナサンとミナの日記を熱心に読むヘルシングを見て、シーワードは「教授は細かいことすべてを正確に知ることによって、なにか手掛かりが得られると考えているようだ」(二六九)と思う。ヘルシングは『我々の希望は、すべてを知ることだ』(二八五)と指摘する。さらに、ドラキュラに関する知識においてはシーワードより一歩先んじているミナは、彼に次のように言う。

「……この恐ろしい怪物を地上から抹殺する戦いにお

いては、できる限りの知識と助力を得なくてはなりません。私にくださったあの「蠟管蓄音機の」蠟管には、あなたが教えようとしたことよりも、もっと多くのことが記録されていると思います。あなたの記録には、この謎を解明してくれる、多くのことが入っています。私にもお手伝いさせてください。あるところまでは、すべてを知っております。……夫はもっと情報を集めようと、ホイットビーへ出かけましたが、明日には戻ります。お互いに秘密を持つ必要はありません。誰かが知らない状態に置かれるより、絶対の信頼をもって、みんなで協力し合った方が、確実に私たちは強くなれます」(二三三)

情報と六人の協力の重要性を知るミナは、記録係りとなつて、各登場人物の間の情報伝達を迅速、かつ容易にする。彼女は速記文字で書かれた夫の日記を、複数のコピーを取りながらタイプで打ち直す。シーワードは日記を蠟管蓄音機に録音するが、彼女はその内容についても同じようにタイプで打ち直す。これによって、全員がドラキュラと吸血鬼に関する詳しい情報を等しく得ることが可能となる。

逆に言うと、情報不足は直ちに危険にさらされることを意味する。ミナは「誰かが知らない状態に置かれる」ことの危険性に気づいていても、彼女をドラキュラとの戦いに巻き込むまいとする男たちの思いやりを受入れざるを得ない。そしてその戦いが彼女にとって「封印された本」(二五四)となるや、たちまち彼女はドラキュラに襲われ、血を吸われることとなる。ミナの日記は、「今日のように、なにも教えてもらえない状態にいるのは、奇妙な気がする」(二五六)と始まる十月一日から、「悲しい」「気が滅入る」「だるい」という言葉が急に目につくようになる。ドラキュラは、白い霧に姿を変えて部屋に侵入し、彼女を襲うが、ミナにはすべてが夢のように思える。「私は眠ってしまったに違いない」「私は眠っていたと思う」(二五八)という言葉は、ジョナサンの日記を思い出させる。さらに、この日を境に、彼女は涙もろくなり、夫のジョナサンは、彼女がいつもより「顔色が良くない」ことに気づくようになる。ルーシーの前例を知る読者には、これらすべてが何を表すかは明らかである。

ドラキュラは再びミナを襲う、それも、彼女が夫と寝ているベッドの上で、襲う。この時、彼はおよそ吸血鬼らし

くないこと、吸血鬼伝説には無い行為を彼女に強要する。人間の血を吸うはずの吸血鬼が、自らの胸に爪で傷をつくり、「子供が子猫に無理やりミルクを飲ませようと、鼻を血の中に突っ込む」(二八二)ように、襲った相手に自らの血を無理やり飲ませる。ミナが、この「血による吸血鬼の洗礼」(三三二)を受ける場面に充滿する性的暗示については、いずれ改めて分析するとして、ここでは情報を絶たれることは無防備になることを意味すると、指摘しておく。さらに、ドラキュラは、この場面に先立ち、自分に関する情報を詰め込んだ書類と蠟管を火の中に投げ込んでいるが、これは彼が自分について知られることを、何よりも恐れていることの証拠であると、付け加えておく。

ミナを襲ったあと、ドラキュラは、ただひたすら、逃げ出すことだけを考える。ジョナサンの日記に登場するドラキュラは、常に舞台の中央で脚光を浴び、その強大な超自然的の力と恐ろしさを読者に見せつけた。その後、イギリスに渡ってからは、あまり姿を見せることなく、いわば舞台裏から無言の脅威を読者に与え続けた。しかし、この時点から、ドラキュラの脅威はかなり減少していく。柩の中に閉じ籠もり、自分の城に運ばれるのをじっと待っているだ

けの存在となるからだ。そして、彼をそのような状態に追い込むのは、吸血鬼伝説という武器を持った六人の人間である。

ヴァン・ヘルシング教授は、全員に吸血鬼伝説と、そしてドラキュラの過去を詳しく教える。彼の話を聞くことによって、読者は吸血鬼、とりわけドラキュラが大きな超自然的の力を持つと同時に、いくつかの弱点をも兼ね備えていることを知る。その多くは、すでに読者には知られていることではある。なぜなら、ジョナサンの日記と、そのあとに続く「吸血鬼」ルーシーに関する部分は、吸血鬼伝説の例証であるからだ。

六人は、聖なるものを恐れ、近づけないという、吸血鬼の弱点を利用し、ドラキュラがイギリスに持ち込んだ五十の柩の内、四十九を聖餅によって清め、「殺菌」(二七四)してしまふ。ドラキュラはただ一つ残された、そして六人が発見できなかった柩に横たわり、水路を使って故郷のトランシルヴァニアへ逃げ帰ろうとする。作品は、この辺から怪奇的雰囲気は薄れ、犯人を追い詰めていく探偵小説の様相を呈し始める。

ドラキュラは「こうもりに姿をかえたところで、流れる

水の上は、自分の意思で渡ることができない」(三三四)ため、船で運ばれる柩の中から出ることができない。彼は敵の動きを知るために、吸血鬼になりかかっているミナとの間のテレパシーを利用する。そして、敵をうまく、まいたと思い込む。ジョナサン、シーワード、アーサー、クインシーの四人は、刑事のようにあれこれ聞き込み捜査をしながら、ドラキュラの動きを探る。しかし、ドラキュラを破壊へと追い込む本当の要因は、ヴァン・ヘルシングの推理である。

ヘルシングは、ドラキュラの頭脳は、所詮、「子供の頭脳」(三〇二)であることを見抜く。この教授の言葉は、一見、矛盾しているように思える。ジョナサン・ハーカーの日記は、ドラキュラの知性の高さを示す証拠をいくつか記しているからだ。彼はまず、語学の天才である。ジョナサンと話す時、本で習っただけの英語を、多少おかしい表現を混ぜながらも、流暢に話す。そして、イギリス侵略に備え、イギリスについて研究すべく、英語の文献を数多く読みこなしている。土地の売買に関する法律的な問題についても詳しく、ジョナサンに「彼はきつとすばらしい弁護士になったであろう」(三一)と思わせる。悪賢さを示す例に

も事欠かない。ドラキュラはジョナサンに三通の手紙を書かせ、故郷に送らせる。いかにも彼が無事であり、予定通り帰国したと思わせるためである。ジョナサンを二箇月近く生かしておいたのも、この手紙の消印のためである。彼はジョナサンの服を着て、ビストリッツアの町を歩き、いかにもジョナサンが城を出たと思わせている。イギリスに戻ったジョナサンは、ドラキュラが事を実行する際に、いかに周到な準備をしていたかに気づく。

すべては注意深く計画され、系統的、かつ正確に実行された。奴「ドラキュラ」は、ひょっとして自分の計画を邪魔することになるかもしれない、あらゆる障害に対しても準備ができていたようだった。アメリカ人の表現を使えば、奴は「運を天に任せなかった」のだ。奴の「五十の木箱を運んだ運送会社に対する」指示が正確に守られたのも、奴の周到さがもたらした、当然の結果に過ぎなかった。(二二六)

ヴァン・ヘルシング教授は、ドラキュラが生前、「優れた頭脳と比類なき学識」(三〇二)をもっていたことを、ア



ルミニウス教授から聞いて知っている。しかし、同時に「一面、彼〔ドラキュラ〕の頭は子供だったし、今でも子供である」ことを見抜く。そして、「子供の頭脳」のままであるこの「一面」とは、自分のことしか考えない自己中心主義がもたらす幼稚さを意味する。ヘルシングはジョナサンの日記に記されていた、ドラキュラの言葉を思い出しながら、彼がその中で、ある習性を自ら暴露していることに気がつく。それはドラキュラが戦いに破れるたびに、自分の城に逃げ帰り、新たな戦いに備えたという習性だ。

さらに、ドラキュラが「自軍の兵士の血に染まった戦場」(二九)にただ一人生き残り、城に逃げ帰ったという事実は彼のエゴイズムを象徴する。

この習性は、六人にドラキュラが向かっている場所を教えることになる。ドラキュラの方は、ヘルシングの推察通り、追手をまいたものと思ひ込み、柵の中で安心して眠っている。自分の身の安全を確信すると、いかにもエゴイズムに固められたドラキュラらしく、彼は居所を知られまいとして、ミナとのテレパシーによる交信を一方的に切ってしまう。「子供の頭脳」しか持たないドラキュラは、それによって、今度は自分が敵の動きを知ることができなくな

ることに気づかない。

こうしてドラキュラは、知らずに敵に与えた情報によって追い詰められ、彼らに滅ぼされる。しかし、クライブ・レザデールは、ドラキュラは本当に滅ぼされたのか、と疑問を投げかける。<sup>(6)</sup>ドラキュラが「最後のとどめ」を刺される場面では、吸血鬼伝説に伝わる、吸血鬼の滅ぼし方が忠実に守られていないからだ。ストーリーカーは最後の瞬間を次のように描いている。

私〔ミナ・ハーカー〕が見た時、その〔ドラキュラの〕目は沈み行く太陽を見た。そして、憎しみの表情は勝ち誇った表情に変わった。

その瞬間、ジョナサンの大きな蛮刀がキラッと光を放ちながら、ひと振りされた。刀がドラキュラの喉元を切るのを見て、私は悲鳴を上げた。同時に、モリスのボーウナイフは心臓に突き刺さっていた。

まるで奇跡を見るようであったが、私たちの目の前であつと言う間にドラキュラの体はぼろぼろの塵となり、見えなくなってしまった。

まさにこの最後の消え行く瞬間、それまで想像もで

きなかったような、安らぎの表情がその顔に浮かんだことは、私にとって終生、忘れぬ喜びになるだろう。(三七七)

ドラキュラの心臓に打ち込まれたのは、木の杭ではなく、鋼のナイフである。しかも、首は切り落とされていない。吸血鬼伝説が教える吸血鬼の滅ぼし方は、もっと手がこんでいて、儀式的ですらある。吸血鬼となったルーシーを滅ぼすために取られた方法は、吸血鬼伝説の指示を忠実に守っていた。ヴァン・ヘルシングは、生前のルーシーの婚約者であったアーサーだけが、彼女の魂を地獄から救い、天国に送ってやる権利を持つと考え、彼に吸血鬼の心臓に杭を打ち込むことを任せる。その前にヘルシングは慎重に指示を与えている。

「この杭を左手に持ち、先端を心臓の上に置きなさい、そして、右手に金槌を持ちなさい。それから我々が死者のために、祈りを唱える。祈禱書を持ってきているから私が読もう。他のものは、私のあとに続いてくれ。神の名において、杭を打ち込みなさい、我々が愛

する死者に安らぎを与え、不死者を滅ぼすために」  
(二二六)

アーサーが杭を打ち込んだあと、ヴァン・ヘルシングとシーワードは、杭の上の部分を鋸で切り落とし、先端を体の中に残しておく。さらに、首をはね、口の中にニンニクを詰め込むと、鉛の柩をハンダで閉じ、蓋をネジで留める。ドラキュラ城に住む三人の吸血女に対しても、ヘルシングは木の杭を心臓に打ち込み、首をはねている。

ところが、ドラキュラの場合に限って、この儀式が守られていない。ドラキュラは、ジョナサンの蛮刀で喉を切られ、モリスのボーウィナイフで心臓を刺された瞬間、塵になっっているため、「正しい処置」をすべき死体は残っていない。さらに、ドラキュラは、ルーシーや三人の吸血女のように、杭を打ち込まれた瞬間、恐ろしい断末魔の叫び声を上げたり、みもだえする姿を見せることはない。彼は一瞬にして、塵となって消えているのである。読者はドラキュラが塵に姿を変えられることを、すでに知っている。ひょっとして、ドラキュラは、敵が吸血鬼を滅ぼすための定められた方法を使わなかったために、塵に変身して逃れた

のだろうか。クライブ・レザデールはそう考えることは可能だと言う。

伯爵が、危うい時に姿を消し、九死に一生を得ると、ストーリーカーが「続き」の中で、再び彼を蘇らせてくれるかもしれない時がくるまで、鳴りをひそめていようと思うのは、考えられることだ。<sup>(?)</sup>

もし、ドラキュラは滅びず、逃げのびたと考えると、最後のジョナサンの「付記」は、いつ壊れるか分からない偽りの安らぎに満ちていることになる。次のように始まる「付記」の中で、彼は現在の幸せな姿を読者に見せてくれるからだ。

七年前、私たちは炎の中をくぐった。そして、そのあと私たちの何人かが幸せになったのは、苦しみに耐え忍んだおかげだと思う。ミナと私にとって、さらに嬉しいことに、息子の誕生日は「戦いの最中に死んだ」クインシー・モリスの命日と同じだ。この子の母親が、あの勇敢な友人の魂の一部が子供に乗り移った

と、ひそかに信じていることを、私は知っている。  
(三七八)

ストーリーカーは、この幸せが、束の間のもろい幸せだと、読者に印象づけようとしているのだろうか。作品を読むかぎり、そうではないと考えざるを得ない。その最も大きな根拠は、ドラキュラの体が崩れて塵となる直前に、彼が見せる「安らぎの表情」である。吸血鬼が呪いを解かれ、「人間の死体」に戻ると、安らかな表情をとり戻すことは、ルーシーが証明している。アーサーの手で心臓に杭を打ち込まれた吸血鬼ルーシーは、柩の中で恐ろしい悲鳴を上げ、激しく悶える。アーサーは、ルーシーの心臓から吹き出す血を浴びながら、それでも義務感から杭を打ち続ける。やがてルーシーの体は静かになるが、そこには大きな変化が現れている。

柩の中には、もはや、あの「忌まわしい物」はなかった——それを滅ぼす仕事は特権として、生前の婚約者に与えられたほど、我々が恐れ、憎むようになった、あの「忌まわしい物」はなかった。そこに横たわ

っていたのは、生きている時に我々が見たまのルーシーであり、その顔は比類なき美しさと清潔さを湛えていた。確かに我々が生前に見た、心労と苦しみからくる、やつれた様子を留めていたが、それはすべて、我々には大切であつた。なぜなら、そこにいるのは、我々が知っているルーシーであることを証明してくれるからだ。我々は皆、やつれた顔と体を太陽の光のよりに包む、神々しい安らぎは、これから永遠に続く安らぎの象徴であることを感じていた。(二二六―七)

ドラキュラ城で三人の女の吸血鬼を次々と滅ぼすヴァン・ヘルシングは、シーワードに宛てた「手記」の中で、それが「屠殺者の仕事」(三七二)のように、凄惨を極めた行為であつた、と言っている。そして、もし彼が「最初の吸血鬼の顔に浮かんだ安らぎ、そいつがついに消滅していく直前、顔に浮かべた嬉しさの表情を見なかつたら」おそらくそれ以上、仕事を続けられなかつただろう、と告白する。ルーシーは滅び、三人の吸血女も滅びた——同様に、「安らぎの表情」を見せてドラキュラも滅びたと考えるべきであらう。

そのように考える根拠は、他にもある。ドラキュラに襲われて以来、吸血鬼への道を辿るミナ・ハーカーである。彼女は、ドラキュラが塵になると同時に、吸血鬼の呪いから解放されるからだ。ミナと共に城に向かうヴァン・ヘルシング教授は、彼女が食事を受けつけなくなるのを見て、確実に吸血鬼になろうとしていることを知る。教授は彼女の回りに円を描き、その上に細かく砕いた聖餅をまく。すると、体の中に吸血鬼の血が流れるミナは青ざめ、体を震わせる。輪の外に出てみなさいと言われても、出ることができない。翌日、ヘルシングは吸血女を滅ぼすべく、城に向かう。その時、狼の遠吠えを聞くヘルシングは、「吸血鬼の墓に眠るより、狼の胃袋に収まる方がまだましだ」(三六九)と思いつつ、ミナを輪の中に一人残していく。翌日二人は依然として狼の遠吠えが聞こえる雪の中で、ドラキュラと四人の到着を待つ。ヘルシングは、再びミナの回りに「聖なる輪」を描く。彼女はその中から、夫ジョナサンとクインシーがドラキュラを攻撃するのを見ている。クインシーは、ドラキュラの柩を運ぶジブシーとの戦いで腹を刺され、まもなく息絶える。彼が倒れるや、ミナはクインシーのところへ走っていくが、それは「聖なる輪は、も

はや「ミナを」閉じ込めてはいない」(三七七)からだ。

ミナが「血による吸血鬼の洗礼」を受けたあと、ヘルシングは彼女を守るために、聖餅を額に置く。そのとたん、聖餅は「真っ赤にやけた鉄のように」(二九六)ミナの額を焼く。以後、彼女の額には「さまよえるユダヤ人」を思い出させるような、火傷の跡が残る。しかし、ドラキュラが塵となって消えると、それは跡形もなく、ミナの額から消える。クインシーは

「神よ、すべてが無駄ではなかったことを感謝します。  
ご覧なさい、彼女の額はこの雪よりもきれいです。呪  
いが解けたのです」(三七八)

と言って、死んでいく。これらの事実、ドラキュラが減じたことを示しているとしか考えられない。

では、なぜストーカーは、ドラキュラを滅ぼすという、最も大切なところで、吸血鬼伝説に従わなかったのだろうか。その理由は、この最後の場面が、どのような状況で繰り広げられるかを考えてみると、明らかにになる。六人は、悠長に「儀式」を行っていられるような状況にはいないの

だ。

六人は、二人一組になり、三手に分かれてドラキュラを追う。ドラキュラがどのルートを使って、城に戻ろうとしているかが分からないからだ。ミナとヘルシングは、一足先に着き、前述のとおり、城の外で四人の到着を待つ。もなく、馬に乗ったジプシーの男たちに囲まれて、ドラキュラの柩がやってくる。ここで重大なのは、時刻である。ドラキュラを滅ぼすのは、日の出から日没までの間、つまり、太陽が昇っている間でなくてはならないが、今はまさに太陽が沈もうとしている。ジプシーの一団を見ながら、ミナはそのことを心配する。

荷車の上には、大きな四角い箱があった。それを見た時、私はドキッとした。最後の瞬間が近いことを感じたからだ。日が暮れようとしていた。それまで箱の中に閉じ込められていた「あの物」が、日没と共にまた自由になり、形を変えて我々の手から逃れることができることは、分かっていた。(三七三)

ドラキュラとの戦いは、いまや、時間との戦いとなる。柩

に追いついたジョナサンとクインシーも、それを承知しているからこそ、しゃにむに彼らの中突っ込んでいき、その結果、クインシーは致命傷を負うことになる。ドラキュラも「沈み行く太陽」を見て、一瞬、自分の勝利を確信する。このような、一秒を争う差し追った状況の中だからこそ、ジョナサンとクインシーは、手に持っていた刀とナイフで、手早くドラキュラにとどめを刺さざるを得なかったのだ。確かに、ここに来て吸血鬼伝説に従わないのは、一つの矛盾ではある。しかし、この緊迫した最後の場面にみながるスリルとサスペンスは、読者を一気に結末まで引っ張っていくので、この矛盾があまり気にならないことも事実である。

ジョナサンの「付記」は、彼とミナが本当の幸せと平和を得たことを読者に知らせるための後書きであると考ええるべきだろう。クインシーは死んだが、彼の死を補うかのように、二人の間には息子が生まれている。ジョナサンがヘルシングの名を全然、口にしないのは多少、気になるが、アーサーとシーワードについては、幸せな結婚をしたと報告されているだけなので、おそらく、老齢のヘルシングはオランダに帰り、特に報告するほどのこともない、平和な毎

日を送っていると想像していいだろう。

シドニー・シェルダンの『神々の風車』に『ドラキュラ』という名が一度だけ登場する。主人公のメアリー・アッシュレーは、アメリカ大使として、ルーマニアへ行く。彼女は暇を見ては、二人の子供をつれて観光地を訪れる。子供たちにとつての観光の「ハイライト」は、「ブカレストからおよそ百マイルほど離れたトランシルヴァニアの真ん中の、ブラソヴにあるドラキュラ城を訪れたこと」だ。彼らの車を運転する大使館付きの運転手フローリアンは、ルーマニア人らしく、ドラキュラに関する知識を豊富に持っている。

「伯爵は、本当は王だったんですよ」フローリアンは車を運転しながら説明した。「ヴラド・ツェペス王といて、トルコの侵略を食い止めた、偉大な英雄でした」「ぼくは、ただ血を吸って人を殺しただけの奴かとおもった」ティムは言った。

フローリアンはうなずいた。「そうです。残念ながら合戦のあと、ヴラドは力を得て、頭がおかしくなり

ました。暴君になり、敵を串刺しにしたんです。吸血鬼という伝説が生まれ、それをもとにして、ブラム・ストーカーというアイルランド人が本を書きました。馬鹿げた本ですが、観光には奇跡を起こしてくれました」

「偉大な英雄」を吸血鬼にしてしまったことに対する偏見から、フロリアンが『ドラキュラ』を「馬鹿げた本」と呼ぶのは当然かもしれない。このような偏見を持たなくても、『ドラキュラ』をそう呼ぶ人は多いだろう、しかも、実際に作品を読むこともなく。しかし、『ドラキュラ』は単に、面白く読めるだけの作品ではなく、文学的にも見るべき点が多いのだ。何よりも優れているのは、リアリズムとファンタジーの対比と融合である。ストーカーは、丹念に細部を積み重ねることによって、作品に「本当らしさ」を与えることに成功している。ミナは、ルーシーの身に何が起こるのではないかと心配し、「一連の出来事の集積」(八八)から、不吉な予感を抱くが、この言葉は『ドラキュラ』の際立った特徴の一つを表している。なぜなら、このちょっとした出来事の「集積」、細々とした事実の積み重

ねによって、ストーカーはリアリスティックな雰囲気を作り上げていくからだ。同時に彼は、非現実的な吸血鬼伝説を、読む者に何の抵抗を与えないことなく、作品に溶け込ませていく。つまり、かれは、合理的世界と非合理的世界を、少しの軋轢を起こすことなく、同居させることに成功している。

この対比と融合は、冒頭のジョナサンとの日記と、それに続くルーシー・プロットの間にも見られる。ジョナサンの日記は、彼が命懸けでドラキュラ城から脱出しようとしているところで終わる。読者を大きな不安の中に残したままストーカーは、突然、ルーシーを登場させる。この時点で読者は、まったく別の作品を読み始めたかのような戸惑いを覚える。しかし、すぐに両者の間に明確な明と暗の対比があることに気づく。ジョナサンは、正気を失いかけるほどの恐怖と怪奇の世界に閉じ込められている。一方のルーシーは日常の世界で幸せに包まれている。ジョナサンは、三人の女の吸血鬼に誘惑され、危うく地獄へ引きずり込まれそうになる。ほぼ同じ頃、ルーシーは、三人の男から同時に求婚される。やがて彼女は、ドラキュラによって、吸血鬼にされていくが、それと共にこの対比は姿を消し、い

つのまにか一つに融合されていく。

作品には、いくつかの欠点も見られる。たとえば、ミナ・ハーカーがあまりにも理想化されている結果、彼女が登場する場面のいくつかに於いて、ストーリーカーはセンチメンタリズムに陥ってしまう。これはルーシーの場合には、まったく見られなかったことだ。ミナはビクトリア朝の理想的女性で、貞淑にして愛情豊かな妻である。そして男に強く母性を感じさせる。そのためか、アーサーはルーシーの死後、ミナの前で泣き崩れ、クインシーは目に涙を浮かべて喉を詰まらせる。この傾向は、彼女が吸血鬼になりかかると、いっそう強まる。五人の男達はミナの前でそっと涙を流したり、全員そろって号泣したりする場面も出てきて、読者を多少、辟易させる。

日記の日付にも、明らかな誤りが一つある。ルーシーに結婚を申込み、断られたことを記すシーワドの日記の日付は、五月二十五日でなくてはならないのに、四月二十四日となっている。「昨日、断られてから、私の心は一種の空白状態だ」(六〇)と彼は記しているが、「昨日」というのは五月二十四日を指す。

しかし、こうした「些細な」欠点は、作品の印象を損な

うことはない。物語はそれを感じさせないだけの緊迫感を漂わせながら、進んでいく。そして、ドラキュラが追い詰められる最後の場面で、この緊迫感は一気にクライマックスに達する。この場面においても、ストーリーカーはリアリズムとファンタジーの間のバランス感覚を失わず、作品を「本当らしさ」の雰囲気の中で終わらせる。最後に、この作品の読後感を次のように述べる、S・L・ヴァーナー・ナードのこゝばを引用しよう。

読者は、『ドラキュラ』の中で遭遇した、様々な驚くべき出来事の下にある、より深い事実を垣間見たと、はつきりと感じつつ、この本を置き、現実の世界に戻っていく。(9)

#### 注

(1) Bram Stoker, *Dracula* (Oxford University Press, 1983), p. 1. 以後の引用はこの版による。

(2) この性的イメージには『カミーラ』の影響も感じられるが、二つの作品における現れ方は、まったく異なる。カミーラはローラに強い同性愛を抱き、ローラと一緒にいる時に激しい性的興奮を覚えるが、カミーラが実際に血を吸う



場面では、性的イメージは消えている。それに対し、『ドラキュラ』では、吸血鬼は血を吸う直前、性的魅力によって、相手を一種の恍惚状態にし、抵抗力を奪ってしまう。

- (3) レイモンド・T・マクナリー、ラドゥ・フロレスク著、矢野浩三郎訳『ドラキュラ伝説―吸血鬼のふるさとをたずねて』(角川書店・一九七八)二五頁。

- (4) Margaret I. Carter, "A preface: from Polidori to Prest", XXXV, to Thomas Preskett Prest, *Varney the Vampire, or the Feast of Blood* (Arno Press, 1970).

- (5) ブラム・ストーカーは、この話の中にブダペスト大学のアルミニウス・ヴァンペリー教授を実名で出す。アルミニウス教授は、著名な歴史家、東洋学者、言語学者、民族学者、そして探検家であり、ストーカーは、彼からヴラド・ドラキュラと吸血鬼伝説について教わったと言われている。彼の名を実名で出しているのは、おそらく敬意を表するためであろうと考えられている。ただ、クワイプ・レザデールは、『ドラキュラ―小説と伝説』(アクウェリアン・プレス、一九八五)の八九頁で、次のように言っている。

残念ながら、ストーカーとヴァンペリーの会話や手紙の

内容については、何も知られていない。ヴァンペリーが、吸血鬼、あるいは、いわゆるドラキュラに関することを書いたとしても、現在は何も残っていない。『ドラキュラ』とヴァンペリーのつながりが強くないことを証明する強力な根拠は、この作品に見られるドラキュラ、あるいは吸血鬼一般に関するすべての重要な知識は、実際には、ストーカーのノートにリストアップされている本や記事に載っているところだ。このノートの中に、ヴァンペリーの名前を見つけることはできない。言い換えると、彼がストーカーの調査に大きな貢献をしたかしかかったかは定かでないが、いずれにせよ、『ドラキュラ』は彼がいなくても、現在の形で世に出たことだろう。

- (6) 同。  
(7) 同 一一頁。  
(8) Warner Books, 1987, p. 290.  
(9) *Haunted Presence: The Numinous in Gothic Fiction* (The University of Alabama Press, 1987), p. 114.